

大学生における自傷行為と対人関係  
—愛着スタイルおよび感情イメージとの関連から—

Interpersonal Relationships Affecting University Student's Self-injury:  
Attachment Style and Affective Imagery

大 平 泰 子      大 石   昂      鈴 木 賢 男<sup>1</sup>      松 野   真<sup>2</sup>  
堀 内 正 彦<sup>3</sup>      鈴 木 国 威<sup>4</sup>

OHIRA Taiko, OISHI Takashi, SUZUKI Masao, MATSUNO Makoto,  
HORIUCHI Masahiko, SUZUKI Kunitake

大学生における自傷行為の実態と、自傷行為と対人関係の問題との関連について明らかにするため、自傷行為、愛着スタイル、感情イメージに関する質問紙調査を実施した。分析対象者は594名（男性255名、女性339名）で、平均年齢は19.2±1.5(mean±SD)歳であった。調査の結果、自傷行為の経験率は20.7%で、性差はみられなかった。ロジスティック回帰分析で自傷経験に関連した変数は、「見捨てられ不安」「無視」であった。男女別にみると、自傷経験に関連した変数は、男性では「見捨てられ不安」「束縛」「デート」、女性では「見捨てられ不安」「服従」「暴力」「無視」「結婚」であった。概して、自己観がネガティブで見捨てられ不安が強い、無視に対してネガティブな感情が強い、親密な他者との安定した関係にポジティブな感情を持ってない傾向が、自傷行為と関連していると考えられる。性差については、自傷行為の分類を念頭において検討する必要がある。

キーワード： 自傷行為、感情イメージ、愛着スタイル、大学生、性差

## はじめに

自傷行為(self-injury)は、医療機関のみならず、学校教育の現場においても対応に苦慮する問題の一つである。中学校・高等学校の養護教諭を対象とした調査では、養護教諭の98～99%は自傷をする生徒に対応した経験があることが明らかにされており<sup>1)</sup>、自傷行為は青年期において決し

---

<sup>1</sup> 文教大学人間科学部

<sup>2</sup> 千葉市中央児童相談所

<sup>3</sup> 駒澤大学文学部

<sup>4</sup> 大阪人間科学大学人間科学部

て希な問題ではない。学校保健においても重要な課題となっており、関心も高まっている一方、本邦における自傷行為に関する実証的研究は未だ十分に行われていないのが現状である。

「自傷」とは、Favazza<sup>2)</sup>の定義では、「明確な自殺目的を持たずに、意図的に身体の一部に損傷を負わせること」とされている。Walsh<sup>3)</sup>によれば、「意図的に、自らの意志の影響下で行われる、致死性の低い身体損傷であり、その行為は、社会的に容認されるものではなく、心理的苦痛を軽減するために行われる」と定義されている。自傷行為は身体の様々な部位に対して広範囲に行われるが、なかでも手首自傷については早くから注目されていた。本邦においても、手首自傷について多くの事例が報告されている。西園<sup>4)</sup>は自己愛的障害、神経性無食欲症との関連性を指摘し、思春期後期の分離個体化の失敗の結果として解釈している。竹内<sup>5)</sup>は、30例の手首自傷について報告している。彼らは自験例の分析から、患者を「ヒステリー群」「抑うつ群」「青年期の行動異常群」「その他」の4つに分類した。「ヒステリー群」では、時には傷を医師や看護者に見せたがるなどアピールの意図もみられる。「抑うつ群」では、抑うつ的な気分の時に自傷が行われる。希死念慮も明確で、自傷は自殺企図のリハーサルとして行われる。「青年期の行動異常群」は、ほとんどが女性で、親子関係などの葛藤が動機となって自傷行為が引き起こされる。「その他」には統合失調症などによる自傷が含まれる。また、向精神薬過量服用(overdose)については、自殺企図とみなすか自傷行為とみなすかについての一定の見解が得られていないが、救急外来を受診した向精神薬過量服用患者を対象とした検討<sup>6)</sup>では、その誘因として、家庭環境、対人関係、不眠、異性問題、職場環境などが多くみられたと報告されている。Klonsky<sup>7)</sup>のレビューによれば、自傷行為はネガティブな情動を軽減するために行われることが多く、自己懲罰機能や対人関係の影響などもある<sup>7)</sup>。

このように、自傷行為経験者の特徴や自傷の契機について様々な指摘がなされているが、対人関係の問題について言及している報告は多い。そこで本研究では、自傷行為について対人関係に着目して検討する。特に、親密な異性関係や恋愛関係に影響することが知られている愛着スタイル、そして、対象を想起したり対象に関し想念をめぐらせたりした時に意識される感情イメージについて調査し、自傷行為との関連を検討する。

## 方法

### 調査対象者

関東地区、北陸地区および関西地区にある私立大学の大学生 729 名を対象として質問紙調査を行い、本研究において分析に使用する項目に回答の不備がなかった 594 名（男性 255 名、女性 339 名）を分析対象とした。分析対象者の平均年齢は  $19.2 \pm 1.5$  (mean $\pm$ SD) 歳で、年齢範囲は 18 歳から 36 歳であった。異性との交際経験については、交際経験あり 405 名、交際経験なし 189 名であった。

### 質問項目

①自傷行為：自傷行為について尋ねる質問項目を独自に作成した。「あなたはこれまでわざと自分の身体を傷つけたことがありますか」という項目に対して、「ない」「たまにある」「よくある」の3件法で回答を求めた。

②愛着スタイル：成人愛着研究では、Brennan et al.(1998)によって作成された“親密な対人

関係体験尺度(Experiences in Close Relationships inventory; ECR)”が広く用いられている。ECRは恋愛対象への愛着スタイルを測定する尺度であり、「見捨てられ不安」「親密性の回避」の2因子からなる。本研究では、中尾ら<sup>9)</sup>によって作成されたECR日本語版(成人愛着スタイル尺度)の一部を使用した。各因子について、因子負荷量の高い順に2項目を選択した。「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の5件法で回答を求め、それぞれ5、4、3、2、1と数量化した。

③感情イメージ：上杉<sup>9)</sup>によって開発されたイメージ調査法を用いた。この調査法は、感情研究としてのSD法と創造性開発技法としてのKJ法からヒントを得ているものである。対象語と感情語を対にして提示し、その対象に関してある感情が近いと思うか遠いと思うかを5段階で主観的に評定する。感情との<近さ-遠さ>についての評定は、「近い」=+2点、「やや近い」=+1点、「どちらともいえない」=0点、「やや遠い」=-1点、「遠い」=-2点として数量化する。これまでの研究<sup>10) 11) 12) 13)</sup>から、対象に対する感情は“プラス感情-マイナス感情”という次元で構造化され、各感情の次元に関与する負荷量も安定していることが明らかにされている。これを重みづけとして、それぞれの絶対値を合計した後、感情語の数で除算し、それを10倍した値が対象語に対する「感情価」とされており、理論値は+20~-20に分布する。本研究では、松野<sup>14)</sup>による若年層における恋人同士の間における暴力行為 dating violence (デートDV)に関する調査と同様に、10の対象語(恋愛、結婚、デート、支配、セックス、無視、束縛、服従、暴力、対等)を用いた。感情語は、喜、悲、怒、嫌の4つを用いた。対象語と感情語の組み合わせは40対となる。感情価を指標とした対象語の因子分析を行った結果2因子を抽出することができ、バリマックス回転による単純解から、支配、服従、束縛、暴力、無視の5つの対象語と対等、デート、恋愛、結婚、セックスの5つの対象語がそれぞれの因子を意味しているものと判断することができ、「他者コントロール」と「親密」と命名した上で、それぞれを構成する対象語の感情価を合成し、感情価尺度得点とした<sup>14)</sup>。

## 結果

### 自傷の経験率

意図的自傷の経験については、「ない」471名(79.3%)、「たまにある」107名(18.0%)、「よくある」16名(2.7%)であった。「たまにある」と「よくある」を合算すると自傷行為の経験を有する者は123名で、本研究の対象における自傷行為の経験率は20.7%であった。性別でみると、男性では255名のうち自傷経験あり45名(17.6%)、女性では339名のうち自傷経験あり78名(23.0%)であった。 $\chi^2$ 検定を用いて性別で自傷行為経験率の比較を行ったところ、有意差は認められなかった( $\chi^2(1)=2.548, p=0.1104$ )。

### 自傷経験有無による愛着スタイルの比較

意図的自傷の経験について、「ない」と回答したものを自傷経験なし群、「たまにある」または「よくある」と回答したものを自傷経験あり群として、愛着スタイル尺度から抜粋した項目の合計得点に関して2群間の比較を行った(表1)。統計的な差はMann-WhitneyのU検定によって確認した。「見捨てられ不安」と「親密性の回避」のいずれの下位尺度においても、自傷経験あり群は自傷経験なし群よりも有意に高得点であった。

表1 自傷経験有無による愛着スタイル得点の比較

	自傷経験なし群 (n=471)		自傷経験あり群 (n=123)		Mann-Whitney の U 検定
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	
愛着スタイル					
親密性回避	4.6	(2.0)	5.2	(2.1)	**
見捨てられ不安	6.0	(2.2)	7.3	(2.1)	***

\*\* p&lt;0.01    \*\*\* p&lt;0.001

表2 自傷経験有無による感情イメージ(感情価)の比較

	自傷経験なし群 (n=471)		自傷経験あり群 (n=123)		Mann-Whitney の U 検定
	Mean	(SD)	Mean	SD	
感情イメージ					
因子1: 他者コントロール					
支配	-10.3	(7.5)	-8.3	(8.9)	*
服従	-9.2	(7.6)	-7.3	(8.6)	*
束縛	-9.2	(8.1)	-8.1	(9.7)	n.s.
暴力	-15.4	(6.3)	-14.1	(7.5)	n.s.
無視	-14.2	(5.6)	-14.8	(6.3)	*
因子2: 親密					
対等	12.9	(7.3)	11.8	(8.2)	n.s.
デート	15.2	(5.9)	13.3	(7.7)	*
恋愛	11.8	(7.3)	9.7	(8.3)	*
結婚	13.4	(7.2)	11.3	(8.3)	**
セックス	7.7	(8.4)	7.1	(8.5)	n.s.

n.s. not significant    \* p&lt;0.05    \*\* p&lt;0.01

### 自傷経験有無による感情イメージの比較

感情イメージ調査の評定からそれぞれの対象語について感情価を算出し、自傷経験なし群と自傷経験あり群の2群間で比較を行った(表2)。統計的な差はMann-WhitneyのU検定によって確認した。その結果、他者コントロール因子においては、「支配」「服従」「無視」で有意差が認められた。両群ともにこれらの対象にネガティブなイメージを持っているが、「支配」「服従」については自傷経験なし群のほうがよりネガティブなイメージが強く、「無視」については自傷経験あり群のほうがよりネガティブなイメージが強かった。親密因子においては、「デート」「恋愛」「結婚」で有意差が認められた。両群ともにこれらの対象にポジティブなイメージを持っているが、自傷経験なし群のほうがよりポジティブなイメージが強かった。

### 自傷に関連する要因

年齢、交際経験、愛着スタイル、感情イメージを独立変数、自傷経験の有無を従属変数としてロジスティック回帰分析を行った(表3)。自傷経験に対して有意な関連がみられた変数は、「見

表3 自傷経験と関連する要因

	全体(n=594) R <sup>2</sup> =.107				男性(n=255) R <sup>2</sup> =.157				女性(n=339) R <sup>2</sup> =.192			
	係数	SE	オッズ比	p 値	係数	SE	オッズ比	p 値	係数	SE	オッズ比	p 値
年齢	.084	.065	1.088	n.s.	.091	.102	1.095	n.s.	.109	.092	1.116	n.s.
交際経験(あり)	.053	.240	1.054	n.s.	-.356	.427	.700	n.s.	.112	.322	1.118	n.s.
愛着スタイル												
親密性回避	.067	.060	1.070	n.s.	-.013	.090	.987	n.s.	.156	.096	1.169	n.s.
見捨てられ不安	.261	.056	1.298	***	.233	.093	1.262	*	.269	.081	1.309	***
感情イメージ												
他者コントロール												
支配	.016	.021	1.016	n.s.	.035	.034	1.035	n.s.	.002	.030	1.002	n.s.
服従	.023	.019	1.023	n.s.	-.057	.034	.945	n.s.	.050	.025	1.051	*
束縛	-.001	.018	.999	n.s.	.084	.031	1.087	***	-.034	.025	.966	n.s.
暴力	.036	.023	1.036	n.s.	-.028	.036	.972	n.s.	.101	.036	1.106	***
無視	-.093	.028	.912	***	-.020	.040	.980	n.s.	-.176	.044	.838	***
親密												
対等	-.001	.017	.999	n.s.	.010	.028	1.010	n.s.	-.022	.022	.978	n.s.
デート	-.056	.029	.946	n.s.	-.101	.045	.904	*	-.037	.043	.964	n.s.
恋愛	.007	.023	1.007	n.s.	-.067	.039	.935	n.s.	.063	.033	1.065	n.s.
結婚	-.030	.021	.970	n.s.	.074	.040	1.077	n.s.	-.115	.032	.892	***
セックス	.016	.016	1.016	n.s.	.024	.032	1.024	n.s.	.037	.023	1.038	n.s.

n.s. not significant \* p<0.05 \*\*\* p<0.001

捨てられ不安」、「無視」の感情価であった。同様の分析を性別で行ったところ、自傷経験に関連した変数は、男性では、「見捨てられ不安」、「束縛」の感情価、「デート」の感情価で、女性では、「見捨てられ不安」、「服従」の感情価、「暴力」の感情価、「無視」の感情価、「結婚」の感情価であった。

## 考察

### 大学生における自傷行為の経験率および性差

自傷行為の経験率については、先行研究によって様々な報告がなされている。本邦における大学生を対象とした自傷行為の経験率は、例えば山口らによる調査<sup>15)</sup>では6.9%と報告されている。本研究では、大学生における自傷行為の経験率は20.7%という結果であった。調査方法が異なるため経験率について直接的に比べることはできないが、臨床の場における調査ではなく一般の大学生を対象とした研究としては高めの結果となった。本研究では、自傷行為に関する質問は1項目のみであり、自傷行為の内容を具体的に尋ねていないため、「わざと自分の身体を傷つけた」という意図的自傷にどの範囲の行為が含まれるのかは、回答者の判断に依拠している。また本研究では、3件法を採用しその回答から経験率を算出したが、3つの選択肢のうち中間で回答しやすい「たまにある」を選択した者が18%となり、2件法の質問であれば自傷経験ありを選択しないであろう軽微なものも含めて選択されていた可能性が考えられる。

自傷行為経験率の性差については、本研究では有意差を認めなかった。一般的に自傷行為は女性に多いという印象を持たれがちであるが、近年の研究では性差がないとする報告が多い。本研究では、自傷行為経験率の性差については、先行研究を指示する結果が得られたと思われる。自傷に関するメタアナリシス<sup>16)</sup>では、男性のほうが重篤な自傷をより行っているが、女性のほうが心理的治療をより受けていると報告されている。自傷の経験率には性差がみられずとも、詳細においては異なる特徴もみられ、今後さらに検討する必要がある。

### 自傷行為と愛着スタイル

愛着スタイルについては、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」のいずれにおいても、自傷経験あり群は自傷経験なし群よりも高得点であった。自傷経験を持つ大学生は、そうでない大学生と比べて、見捨てられ不安が高く、親密性の回避が高いということである。また、ECRの因子は、愛着スタイルの2次元・4分類モデルの自己観と他者観についての考え方に沿って命名されており、見捨てられ不安が高いとは“自己観がネガティブである”ということを示し、親密性の回避が高いとは“他者観がネガティブである”ということを示す。つまり、自傷経験を持つ大学生においては、不安定な愛着スタイルがみられ、自己観も他者観もネガティブな傾向をもつと考えられる。自傷経験の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析では、愛着スタイルの2因子のうち「見捨てられ不安」のみが有意であった。したがって、自己観がネガティブであることで、安定した対人関係の形成に困難がある場合、自傷のリスクが高まるといえよう。

### 自傷行為と感情イメージ

日常生活において重要性を持つ諸対象に結び付けられた感情は、感情イメージとして定着し、安定した因果的構造を形成する。さらに、このように形成された感情イメージは、逆に個々人の生活感情のあり方を規定するものとして機能するようになる。本研究の結果から、感情イメージについては、他者コントロール因子の「支配」「服従」「無視」、親密因子の「デート」「恋愛」「結婚」で有意差が認められた。「支配」「服従」については自傷経験なし群のほうがよりネガティブなイメージが強く、自傷行為経験者では、支配や服従といった関係を好むわけではないものの嫌悪感をあまり持っていないのではないかと考えられる。「無視」については自傷経験あり群のほうがよりネガティブなイメージが強く、無視を嫌う傾向が強いのではないかと考えられる。自傷経験の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析では、感情イメージの他者コントロール因子において「無視」のみが有意であった。無視されることを嫌う傾向は、すなわち、愛着スタイル尺度の検討においてみられた見捨てられ不安の高さにも通じるものである。

### 自傷に関連する要因の性差

年齢、交際経験、愛着スタイル、感情イメージを独立変数、自傷経験の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を性別で行ったところ、自傷経験に関連した変数は、男性では、「見捨てられ不安」、「束縛」「デート」の感情価で、女性では、「見捨てられ不安」、「服従」「暴力」「無視」「結婚」の感情価であった。愛着スタイルにおいては、男女ともに、見捨てられ不安の高さが自傷経験に関連していたが、感情イメージにおいては男女で異なる結果が得られた。特に、他者コントロールの因子では、男性で「束縛」の係数がプラス、女性で「服従」「暴力」の係数がプラス、「無視」の係数がマイナスとなっていて、性差が顕著にみられた。言い換えれば、男性では、相手との関係において「束縛」ということにあまり抵抗感や嫌悪感を持っていない人ほど自傷行為

のリスクが高く、女性では、相手との関係において「服従」「暴力」ということにあまり抵抗感や嫌悪感を持っておらず、「無視」に対しては嫌だと感じている人ほど自傷行為のリスクが高い。以上のことから、自傷の経験率には性差がないと言われているにも関わらず、自傷行為の状況やそれに基づく内容では、異なる点があると考えられる。本研究では種々のタイプの自傷行為を合わせて分析していると考えられ、自傷に関連する要因や機序について検討する場合には、どのような種類の自傷を扱うのかを明確にして検討する必要がある。

## おわりに

本研究では、自傷行為経験者の特徴や自傷行為経験の有無と関連する要因について、対人関係に着目し、特に愛着スタイルと感情イメージの側面から検討することを目的とした。本研究の結果からは、見捨てられ不安が高く、自己観がネガティブで、安定した対人関係を形成しにくい場合に、自傷行為のリスクが高まることが明らかになった。しかし、本研究でロジスティック回帰分析における寄与率は20%を下回る値であり、自傷行為の発生により影響すると考えられる他の要因についても検討する必要がある。さらに、自傷のタイプによって機序が異なると考えられるため、自傷行為の内容についても把握した上で、関連する要因を検討する必要があるだろう。自傷行為に関する適切な理解と対応に役立てるため、さらなる実証的研究の蓄積が求められる。

## 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 基盤研究(C) 23500821 (研究代表者：大石 昂) の助成を受けたものである。

## 文献

- 1) 松本俊彦, 今村扶美, 勝又陽太郎: 児童・生徒の自傷行為に対応する養護教諭が抱える困難について—養護教諭研修会におけるアンケート調査から. 精神医学 51(8): 791-799, 2009
- 2) Favazza AR, Rosenthal RJ: Diagnostic issues in self-mutilation. Hosp Community Psychiatry 44(2): 134-40, 1993
- 3) Walsh BW: TREATING SELF-INJURY: A Practical Guide. The Guilford Press A Division of Guilford Publications, Inc., 2006 (松本俊彦, 山口亜希子, 小林桜児 訳: 自傷行為治療ガイド. 金剛出版, 2007)
- 4) 西園昌久, 安岡誉: 手首自傷症候群. 臨床精神医学 8: 59-65, 1979,
- 5) 竹内竜雄, 小泉準三, 上月英樹: Wrist cutting の 30 自験例について. 臨床精神医学 15: 217-227, 1986
- 6) 大倉隆介, 見野耕一, 小縣正明: 精神科病床を持たない二次救急医療施設の救急外来における向精神薬過量服用患者の臨床的検討. 日救急医学会誌 19: 901-13, 2008
- 7) Klonsky ED: The functions of deliberate self-injury: A review of the evidence. Clinical Psychology Review 27: 226-239, 2007

- 8) 中尾達馬, 加藤和生: 成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版作成の試み. 心理学研究 75(2): 154-159, 2004
- 9) 上杉喬: 感情イメージの研究. 文教大学人間科学部紀要人間科学研究 3: 22-38, 1981
- 10) 鈴木賢男, 大石 昂, 松野 真, 堀内正彦, 鈴木国威, 藤森 進, 岡田 斉: 『感情イメージ調査』についての研究 — 年代を経た大学生においてみられた感情イメージ構造の安定性 —. 文教大学人間科学部紀要人間科学研究 30: 121-131, 2008
- 11) 鈴木賢男, 大石 昂, 松野 真, 堀内正彦, 鈴木国威, 藤森 進, 岡田 斉: 『感情イメージ調査』についての研究 (II) — 諸対象についての感情価尺度の因果論的構造と性格次元との関連性 —. 文教大学人間科学部紀要人間科学研究 31: 189-205, 2009
- 12) 鈴木賢男, 大石 昂, 松野 真, 堀内正彦, 鈴木国威, 大平泰子, 藤森 進, 岡田 斉: 『感情イメージ調査』についての研究 (III) — 個別対象の感情イメージ構造の安定性と対象語・感情語の選定 —. 文教大学人間科学部紀要人間科学研究 32: 173-188, 2010
- 13) 鈴木賢男, 大石 昂, 松野 真, 堀内正彦, 鈴木国威, 大平泰子, 藤森 進, 岡田 斉: 『感情イメージ調査』についての研究 (IV) — 諸対象の感情価を推定するために有効な感情語の選定—. 文教大学人間科学部紀要人間科学研究 33: 197-209, 2011
- 14) 松野 真: 交際経験がある大学生の dating violence に関する感情イメージの諸関連 —感情イメージ調査法による男女の連関図の差異について—. 日本イメージ心理学会第12回大会プログラム・発表論文集, 2011
- 15) 山口亜希子, 松本俊彦, 近藤智津恵: 大学生における自傷行為の経験率 自記式質問票による調査. 精神医学 46(5): 473-479, 2004
- 16) Tantan D, Whittaker J: Personality Disorder and Self-wounding. British Journal of Psychiatry 161: 451-464, 1992